



校長室だより2

黒部市立村椿小学校

文責：校長 寺島紀子

令和8年1月30日

第33号

中野さんの講演から～黒部市小学校教育研究会「全体研修会」報告～

去る19日（月）の午後、市内の小学校の教員がコラーレに集合しての研修会が行われました。毎年1回開かれるこうした場で、今回は黒部市（旧宇奈月町）出身の放送作家である中野俊成さんのご講演を聞くことができました。とても興味深い内容でしたので少し紹介します。

中野さんは放送作家としてこれまで7～800本もの番組の企画に携わっておられます。幾つかの番組名を聞いただけでも、あっと驚くような話題性のある番組ばかりです。今回の講演の前半は、そうした番組を例に挙げながら、企画の際に大切にしていることや、企画によって得られる効果や満足感といったことを話されました。突拍子もないように思える企画（番組）も、その発想の原点には中野さん自身の実体験があるとのこと。そうしたことから、「感情やリアルな気持ちは視聴者に伝わる」「感情が伴う出来事は記憶に残る」という確信をもって中野さんが仕事に当たっておられることを感じました。



★放送作家と先生は似ている？

中野さんの子供の頃の夢は「小学校の先生」（!!）で、そのきっかけは小学4～6年生の時の担任の先生との出会いなのだと。その「舟川先生」は、中野さんが小学校を卒業する時のメッセージカードに「人の気持ちが分かる人間に」と書いてくださったそうです。中野さんは「今思うとそれは『放送作家の仕事じゃん！』 視聴者や出演者の気持ちが分からないとこの仕事はできないですから」と楽しそうに話されました。「考えてみると、人（子供）の人生に感情のついた記憶を残す、という意味では放送作家と学校の先生はけっこう似ているんですね！」 自分の選んだ道が間違ってはいなかつたと気付いた、という中野さんのお話に、聴いている会場の我々も「なるほど！」とうなずきました。それにしても、「学校の先生は子供の人生に感情のついた記憶を残す」とは、深いですね…。気持ちが引き締まります。

★AIの時代だからこそ、人間らしい「感情」を大切に

今や「AI（人工知能）の時代」です。番組づくりにおいても、たとえばAIが作る台本をベースにして人間が仕上げを行うなど、その力を上手く活用することが当たり前となっているのだそうで、「AIは使っていかなくてはいけない時代なんです。」

現在小学生の子供の父親である中野さんは、こうしたAI時代だからこそ「子供にはできるだけ『感情』が伴う経験をさせたい」と話されました。「『感情』は人間らしさ。それが記憶につながり、その記憶が新しいものを生み出すきっかけになるし、コミュニケーションの礎にもなる」との考え方からだそうです。また、「そのためには『達成感』を大事にしたい。AIを使うとしてもその先に達成感があるようにしたい。達成感を得るまでには、人間としてのあらゆる感情が伴うはずだから」とも話されました。AIとの付き合い方にまだまだ疎く、疑心暗鬼な私にとっては「目からウロコ」のような内容でした。

★「叱るって難しくないですか？」中野先生からの質問に…

最後に中野先生は「会場の皆さんへの質問」として「子供を叱るのって難しくないですか？」と投げかけられました。どのように答えようかと思案する中で、最前列に座っていた私にもマイクが回ってきました。私は、「子供との関係性を大事にしています。今、自分は校長なので、担任の時と同じやり方では上手くいかないこともある。どうしたらその子の『心の糸』が動いて、行動の変容につながるのか…。結局はケースbyケースでしょうか」と少々曖昧に答えることしかできませんでした。難しい問題です。

「叱る」と「怒る」は違うとはよく言われることです。「叱る」は理性的に、「怒る」は感情的に、といった受け止め方があると思いますし、一般的には感情的に怒るのはよくないと言われることが多いようです。けれどもその子供と大人との関係性によっては、目の前の自分にとって大切な、自分のことを真剣に思ってくれている大人（親や信頼できる先生）が、時に感情的に怒ったとしたら、その方が「ああ、これは本当によくないことだったんだ」と、子供の心の糸が強く動くこともあるのではないかと、私は思います。「感情」は大切ですからね…。ともあれ今回の講演では考えるヒントをたくさんいただきました。

★この「校長室だより」のカラー版は本校のホームページをご覧ください。★ご意見、ご感想などをお知らせください。お待ちしています！

校長室だよりへの感想・学校へのご意見もお願いします

切り取り

できればお名前or児童名()

学校薬剤師の先生は「チーム村椿小」の力強い一員です

各学校には子供の健康と安全を守るために「学校医」「学校歯科医」「学校薬剤師」の3つの専門職（「学校三師」とも言います）が配置されていることを、皆さんご存じかと思います。このうち「学校薬剤師」は、特に学校の環境衛生の維持・改善に関する指導や助言を行うのが主な仕事となります。



本校は今年度、「えがお調剤薬局」の笠羽平誓先生に学校薬剤師をお願いしています。笠羽先生にはこれまで学校の飲料水の水質検査の立ち会いや環境衛生検査、薬品点検等をしていただきました。

28日（水）には6年生の「薬物乱用防止教室」の講師をしていただきました。日頃から心と体の健康を心がけること、必要な薬は正しく使う一方で「薬物乱用」に関する知識を身に付け、悪い誘いにはきっぱりと断ること等々、スライド資料を基に丁寧に教えていただきました。子供たちにとって新しい学びがたくさんありました。笠羽先生は授業後に

村椿小の子供たちの挨拶や反応がしっかりしていて、嬉しかったです」と感想を述べておられました。

シリーズ「教室におじゃまします」1月29日(木)5年道徳科の巻

本当の友達とはどのような人だろうかという課題に沿って『ミレーとルソー』という教材文を読みました。名画『落ち穂拾い』等で有名なミレーの若い頃の物語で、絵が売れず貧乏だった彼を、風景画家として先に売っていたルソーがさりげなく支えてくれたエピソードが書かれています。特に「君の絵を買いたい人がいるそうだよ」とお金を渡し、実はルソー自身がミレーの絵を買ってくれていたというエピソードがありました。



「なぜ、ルソーは嘘をついてミレーの絵を買ったのだろう」という問い合わせに対して、子供たちからたくさんのよい意見が出ました。

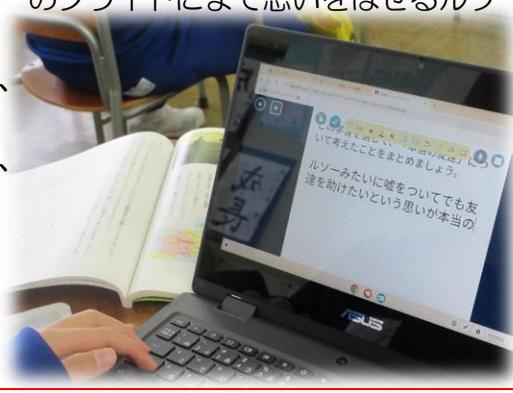


「ミレーに（食べるもののことを気にせず絵に打ち込める）ちゃんとした生活をしてほしかったのでは？」

「自分自身がミレーの絵がいいと思ったからでは？」「売れないミレーがかわいそうだったから」等の意見の後に、「（自分ではなく）他の人が買ったという方がミレーが喜ぶと思ったからでは？」という意見も出ました。なるほど、画家としてのミレーのプライドにまで思いをはせるルソーの優しさ、ということでしょうか。

思いついた意見をすぐに口にする子も何人かいましたが、坪野先生はそうしたつぶやきを聞き逃さず教室全体に広げ、考えを深めていました。

授業のまとめはいつものようにロイロノートに各自が入力し、名前を伏せた状態で皆で回答共有をしました。



＜おまけのひとりごと＞放送作家の中野さんとは同じ歳ということもあり、事前の打合せの時から勝手に親しみを感じていました。実際にお会いすると、とても気さくでありながら、これまでたくさんの仕事を成し遂げたプロとしての自信も感じられました。高校3年生まで「夢は小学校の先生だった」ということですが、「ビートたけしと仕事がしたい！」という強い憧れから、放送作家を目指すことになったとか。のちに「たけしの本当は怖い～」というあの有名な番組も手がけ、夢を実現させたとのこと。かっこいい！

★この「校長室だより」のカラー版は本校のホームページをご覧ください。★ご意見、ご感想などをお知らせください。お待ちしています！

校長室だよりへの感想・学校へのご意見もお願いします

切り取り

できればお名前or児童名()